緑爽会報　NO.113
‘12年11月26日
発　行
公益社団法人
日本山岳会 緑爽会
☎ 03-3261-4433
事務局　松本恒廣
夏原寿一　近藤雅幸
近藤　緑　川口章子
横山　隆　渡部温子

11月山行、幕岩　無事に終わる

左の写真は、夏原寿一さんから寄せられた速報、添え書きに当日の模様が記されています。

「雲が厚くなってきたから早めに下ろう…」（幕岩頂上にて）。　詳細は次号に掲載します。

◆忘年会のお知らせ◆

日時　１２月１１日（火）１３時～１６時

場所　日本山岳会会議室　会費　１０００円

お話は、国見利夫（元緑爽会代表）さんの

「山脈　人脈─歩いてきた道」を予定。

準備の都合上、申込みは12／５までに川口章子(☎&fax 047-463-8721)へ。

◆緑爽会新年会◆

「南アルプスの登山史を探る」企画展訪問

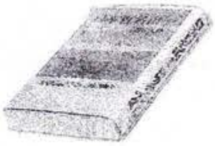
期　日　1月２４日（木）　　日帰り（雨天決行）
場　所　南アルプス芦安山岳館：白雲荘
集合時間　甲府駅改札口　１０時
会　費　３０００円
係　り　里見清子　渡部温子（☎047-339-2262）
締切り　1月１４日　渡部まで
その他　甲府─芦安間タクシー代は別途精算します

★

会報１０８、１１０号に掲載された宮澤憲さんの北岳バットレス中央稜初登攀に使ったピッケルや、登山史を伝える資料を鑑賞します。

その後、近くの白雲荘にて昼食懇談会（入浴可）

鼎談「深田久弥を語る」



深田森太郎（久弥長男）
藤本　慶光（前副会長）
大森　久雄（編集者）
司会　近藤　緑

司会　本来なら夫の近藤信行が一役担わなければいけないのですが、今日は門前の小僧の私が進行役を務めさせていただきます。近藤が出版社に入って最初に企画した本が深田さんの『ヒマラヤ 山と人』（昭和３１年中央公論社刊）でした。そんなことから深田さんとのご縁ができ、結婚後は夫婦ともども松原のお宅に伺うようになりまして、先生ご夫妻にはたいへんお世話になりました。そのご恩返しのつもりで大役を務めたいと思いますが、不慣れですので、どうかよろしくお願いいたします。それでは森太郎さんからどうぞ。

父との関係が濃密だった金沢時代

深田　私は人前で話すことが苦手です。マスコミとかジャーナリズムについてならともかく、父親のことを話せと言われると困ってしまいます。お断りしたいところですが、両親が近藤さんご夫妻と親しくしておりましたし、私もそれを傍で見て知っていたものですから、今度のことはお引き受けしなくてはと思ったわけでございます。

振り返ってみますと、父親と一緒に暮らしたとか、一緒に山へ行ったとかいう経験は、そう多くはありません。私が生まれた昭和17年には、父は支那（現 中国）に応召されておりました。昭和２０年、東京が空襲されるようになって、母の志げ子と母方の祖母と3人で越後湯沢に疎開しました。最初は高半旅館という川端康成の『雪国』で有名な宿にいたのですが、そこへ海軍軍司令部の一部が疎開してくることになって、民間人は出て行けと言われて近くの小さな旅館に移りました。そのとき、母と祖母とが「海に行かなきゃならない海軍さんが、湯沢の山の中に逃げてくるようじゃ、日本も敗けだね」と言ったそうです。もちろん、後で聞いた話ですけど。

昭和２２年になって、母のところに連絡があったのでしょう。「お父さんが帰ってくるよ」と言って、私の手を引いて湯沢の駅へ行ったのです。兵隊さんはたくさん降りてくるけれど「お父さんはいないわねえ」と母は言うのですが、私は会ったことがないからわからない。そんなことを繰り返しているうちに、ある日、父親が帰って来ました。

「あ、お父さんがいた！」と母が駆け寄ったのですが、私は、髭ぼうぼうの人を見てクマにでも遭ったようで「キャッ！」と言って母の後ろに隠れてしまった（笑い）。それが父親に会った最初の記憶です。

5歳のとき、母が身ごもったということもあって、父の郷里の江沼郡大聖寺町（現 加賀市）に移住します。父の実家は印刷業で、父の弟が後を継いでいたのですが、母のお産のためにそこを頼って行ったのです。小さな町でコミュニティが濃密ですから、「久弥さんが帰ってきた」というので家を貸してくださる人がいて、そこで弟が生まれたのです。

私はその町の錦城小学校に入学したのですが、そこの校歌は父親が作詞したもので、私もその校歌を歌いました。

戦後すぐには、父も文士としての仕事はなかったのでしょう。私を連れてよく散歩に行

写真　左から司会と大森・深田・藤本の皆さん

きました。大聖寺は海辺の町ですが、すぐ裏に錦城山という里山があって、そこへよく連れて行ってくれました。

あまり話したくないことではありますが、私の母は父の2度目の妻で、最初の奥さんは北畠八穂さんという高名な童話作家です。弟が生まれて、ようやく北畠さんとの離婚が成立したのです。その頃になると、だんだん中央の出版社から人が訪ねて見えるようになって、そうした方たちに大聖寺ではあまりにも不便だというので、金沢へ転居したのです。

小学校3年から中学1年までは金沢で過ごしました。その頃が、私にとっては山との蜜月時代だったと思います。近くの医王山（いおうぜん）などに行ったり、能登半島の低い山や、海で泳いだり。何といっても毎年のように登ったのは白山でした。当時は登山用具もなくて、普通の靴で白山に登ったのですから足は冷たいし、雨に降られると木綿の学生服がずぶ濡れで辛い思いをしました。室堂も今と違って汚い小屋で、父親と二人きりでいるとヒューヒューと風の音がして、怖くて一晩中父にしがみついていたこともありました。

あるとき、父親と白山に行って、大雨の中をほうほうの態で下りてくると、金沢は洪水で我が家の一階は完全に浸水して畳がぷかぷか浮いていました。「こんなときにお父さんは頼りにならないんだから」とか言いながら、母親が八面六臂の活躍で、階下にあった父の蔵書や原稿を二階に運んで、なんとか商売道具だけはコトなきを得たのですが、私のランドセルや教科書は全部流されてしまった（笑い）という記憶があります。

白山へ行ったのは私と父だけでしたが、立山に登る頃には、弟も5歳くらいになっていたので、家族登山でした。室堂の小屋に泊って、目の下に雲海を見て感激したことを覚えています。

東京へ来てからは、反抗期でもあったし、山へ行くより、友達との付き合いが大事になってきた。進学したのが戸山高校で受験校だったのと、山以外にも面白いことがあるのではないかと目覚めたりして、あまり山へは行かなくなった。ここにおいでの大森久雄さんがご苦労して出してくださった『わが愛する山々』(ヤマケイ文庫)という本がありますが、それは親子3人の家族登山で、登場するのは弟の沢二なんですね。友人から「君は全然出て来ないじゃないか」と言われました。あの頃は、親父に反抗して一緒に山に行かなかったのです。

山に関して言えば、父との関係は金沢時代がいちばん濃密でした。東京に来てからは、同じ家に住んでいますから、玄関に父のキスリングが置いてあったり、山靴が脱いであったりする中で育ったのですが、山のことでコミュニケーションがあったという記憶はありません。私は早く結婚して家を出てしまったので、父親と一緒に暮らした期間は短いのです。それでも新聞社に就職して数年たった頃、「親孝行もせにゃいかんかな」という気持ちになり、母親も父子の間を取り持つように「今度お父さんが××に行くから、あなたも時間があったらお伴したら」と言うので、比較的近場の筑波山とか、丹沢の山へ付いて行ったことがあります。まもなく父が茅ヶ岳で急逝したので、それが最後の親孝行になりました。

父との関係はそれで途切れてしまったのですが、父がモノ書きでよかったなと思うのは、父親のことを追憶したいときには書いたものがあること。それを読んで「これを書いたのは、自分の今の年齢だった」と、サラリーマン時代にはよく考えていました。私が４０代で部長になったときも、その年の父親はどうしていたかなと考えたりして、常に自分の人生を父親と重ね合わせてきました。今年、私は７０歳になりました。久弥は６８歳で亡くなったので、もう重ね合わせることはできません。後は、父親以上に生きているから、親が足を踏み入れなかった、大げさに言えば未踏の世界を歩いているという気持ちでいます。

最後に、よく皆さんから「深田さんはお父さんの百名山をいくつ登ったの」と聞かれます（笑い）。今日、ここへ来る前に数えてみたら４８座。まだ半分も登っていないのですね。生涯に果たして全部登れるかどうか。そんなにこだわることもないのかなとも思います。

ヒマラヤを目指す学生に示した三原則

藤本　実は、深田森太郎さんとはご縁がありまして、同じ山登りの仲間に入れていただいて、時々ご一緒に山を歩いておりました。それで今日のご指名があったので、私がお父様と特別に深い縁（えにし）があったとは言えません。

三つだけ皆さんにご紹介したいと思います。今から５０年も前のこと。ヒマラヤへ行くのが大変な時代に、深田さんはわれわれ学生に三つの条件をお示しになりました。

ヒマラヤに行きたかったら、第1番目には、大企業や官庁に就職するな。2番目は、ネパール語とかウルドゥ語を勉強しなさい。3番目には美人の奥さんを娶ってはならない、という三原則です。それをお話になった場は、私ども東大スキー山岳部が部費を稼ごうと映画会を開催した際に、深田さんをお招きして講演をお願いした時です。そのときのお話が活字になったかどうか知らなかったのですが、森太郎さんに伺ったところ、ジュガール・ヒマール遠征記録『雲の上の道』（新潮社刊）の中に後日談として載っていることを教えていただきました。（ほかに『深田久弥 山の文学全集 VI 雲の上の道』所収「ヒマラヤ随想 ヒマラヤを志す学生諸君に」）。

深田さんが初めてヒマラヤに行かれて帰国された直後、その年の秋に私たちがお呼びしたことになります。どうして私どものような学生が深田さんにお願いできたのかと言いますと、同じ山岳部に大貫良夫くんがいまして、大貫くんのお父さんが小学校の先生をされており、その生徒さんに森太郎さんの弟の沢二さんがおられた。つまり深田さんはＰＴＡの会員だったわけです。そんなご縁で大貫くんと私で松原のお宅にお願いに行ったのです。ちなみに大貫くんはアンデスの考古学で頑張っていて、ＪＡＣの会員番号は５４２４番。かつて「山日記」の編集委員もしていました。

話は違いますが、日本山岳会は会員番号が非常にモノを言いまして、4ケタと5ケタでは身分が違うように言われます（笑い）。私は１２６６０番で5ケタ。大貫くんと一緒に入会していれば、５０００番台で、今頃はさぞかし威張れたのではないかと思います(笑い)。

そのお話をされた後、深田さんは目の前のわれわれに向かって「私は東大の学生は好きではない」と言われたんです（笑い）。それはそうでしょう。その頃、東大の連中にヒマラヤへ行こうなんて話はありませんでした。京大が学術隊とか、チョゴリザ遠征をやっているのに比べたら、なんと言われても仕方がなかった。深田さんの話で奮起したわけでもないでしょうが、東大が初めてヒマラヤに挑戦するのはそれから5年後、１９６３年にカラコラムに遠征、バルトロカンリに登りました。

2番目のネパール語かウルドゥ語をという条件ですが、私もヒマラヤへ行くときにウルドゥ語を一所懸命勉強しました。あの頃、南まわりでは午前1時か2時にカラチに到着し

たのですが、リエゾン・オフィサーが迎えに来ていて私がウルドゥ語で挨拶をしたらしい。私は覚えていないのですが。彼はビックリしたようで、ヒマラヤに行っている間中、言われました。そんな現地語もカラコルムの奥に入るとバルティスタン語に変わって行くので、通用しなくなるということがありました。

私の場合、深田さんの言う第1の条件は、サラリーマンだったのが、あえて半年休んでヒマラヤに行ったということでクリア。第2のウルドゥ語も教えに従いました。最後の佳人を娶るなということは、遠征のとき私はもう結婚していました（笑い）。だからと言って早く帰りたがったということはありません。古くから海外に出ていた西洋人に比べて、日本人があまりにマイホーム的なのを、深田さんはこうした言葉で表したのでしょう。そうした「檄」をいただいたことが、深田さんとのご縁だったと思います。

もう一つは、写真家でもない私の写真を、深田さんが使ってくださったことです。『ヒマラヤ登攀史』（岩波新書）第1版は深田さんがヒマラヤへ行かれる前にお出しになっています。まだ14座のうちのダウラギリ、ヒドン・ピーク、ゴザインタンが未登頂の時期でした。この本は、最初に2ページの写真しかなくて、あとは挿絵です。当時の日本ではヒマラヤの写真が手に入らなかったからでしょう。

第2版では、各山の写真を入れています。その時、手近にあったからでしょうか、私のブロードピークとK2の写真を使ってくださった。私のような素人にとっては、たいへん光栄なことです。当時35ミリのハーフサイズのカメラがありましたが、私はマミヤシックスの6×6判を持って行ったので、私の写真だけが印刷に値するということで出してくださったのかもしれません。写真家の目からみて、いい写真かどうかは問題外（笑い）ですが。

当時、カラコルムのこの地方に入ったのは、1955年の今西錦司さんの学術隊と、1958年のチョゴリザと、私たちの隊と3隊だけでした。私のと、チョゴリザに行かれた芳賀孝郎さんの写真が使われています。G2の写真も使ってくださったのですが、名前が違っていて、改訂版では直っています。これらの写真は、今では撮ることができません。インドとパキスタンの戦争のために、バルトロカンリとか、シアカンリの辺りにはパキスタン軍の基地が出来ていて入ることができません。ガッシャブルム氷河の右岸は入れますが、左岸には全く入れません。ですから貴重な写真になっています。

写真のお礼にと、深田さんからは「深田久弥」とサインした第1版の本をいただきました。私にとっては宝ものです。この『ヒマラヤ登攀史』第2版は、岩波新書の中でも1988年のリクエストで他の名著とともに20点に選ばれていて、貴重な本になっています。

もう一つ、『日本百名山』は広く知られておりますが、『世界百名山』は、どれくらい読まれているでしょうか。これは深田さんが茅ヶ岳で亡くなられたので、41座で中断しています。この中に1970年に私が差し上げた年賀状のことが出てきます。私が彫ったムズターグ・タワー（7273m）の版画を引き合いに出して「ヒマラヤに行って七年たつが、まだバルトロ氷河から見たムズターグ・タワーが忘れられないとみえる。子供が二人もいるのに」と冷やかしの文章を書いておられます。私は知らなかったのですが、友だちから「お前のことが出ているよ」と言われて、早速この本を求めたのですが、すでに著者は亡くなられておりました。

深田さんから冷やかされた版画入りの年賀状

個人的なことではありますが、印刷になっておりますので、公けにしてもいいかと思いご紹介させていただきました。

深田さんだから書けた『日本百名山』

大森　私は学校を出てからずっと出版社にいて、もう50年以上も編集の仕事をしてきました。編集したり、原稿を書いたりすることは当り前なのですが、こういうところで喋ることは非常に苦手です。話をする側は一方的に不利だと思います。皆さんからこちらの顔を覚えられてしまうのに、私は皆さんの顔を覚えきれない。不利な立場です（笑い）。

今朝、何を話そうかとメモを作ってみたのですが、とてもじゃないけど、こんなには話せない。全部話したら1時間以上かかるメモが出来てしまったので、ものすごく削ります。その代わり、私の書いた本『山の旅 本の旅 登る歓び 読む愉しみ』（平凡社刊）の中に深田さんのことが沢山書いてあります。『山と渓谷』誌その他で、私は深田さんのことを書いてくれと言われて、いろんなことを書きました。それをいっぺんバラして、組み立て直して、この本の中に「深田久弥の山と日本百名山」という章を作って収めたのです。私としては、深田さんのことはこれで充分なので、これからは文章を書いても、今日のように話をしても、全部繰り返しになってしまう。だから深田さんのことは、もう頼まれても一切書かない、喋らないつもりでいたのです。

それなのに、これだけ知っているんだから話をしてくれ（笑い）ということが起きちゃうんですね。例えば大聖寺の「深田久弥 山の文化館」から頼まれて、いやですとは言えないんです。今日も近藤緑さんから頼まれると、いやだと言えない（笑い）。私は元図書委員だったんですが、いま図書委員会の委員長をしている三好まき子さんからも喋ってくれと言われたのを断っていた。この間、三好さんと飲んでいたら「なんで今度は出るんですか」と言われた。「緑さんからじゃ仕方がない」と言ったら「緑さんから頼まれたら出て、私が頼んでも出ないのはどうしてですか」とからまれてしまった（笑い）。

そんなわけで話ははしょりますから、ぜひこの本（前述の『山の旅 本の旅』）を読んでいただきたい。自分の本の宣伝をしているんじゃないですよ。深田さんとはどういう人なのか、深田さんの書いたのはどんなもので、『日本百名山』はどういう本なのか、ここに詳しく書いてありますから、私の話を聞くよりもずっと役に立ちます。

この本は（と、提示して）、ヤマケイ文庫編集部から「深田さんのものを文庫にしたい」と相談があって、それなら『わが愛する山々』だよと言ったら、解説と注をつけてくれと言われてやりました。

これは高辻謙輔さんが書いた『日本百名山と深田久弥』（白山書房刊）、それから田澤拓也さんの『百名山の人』（角川文庫）—これは深田さんの伝記です。緑さんのご主人の近藤信行さんの『深田久弥 その山と文学』（平凡社刊）もある。これが一番くわしいですね。全部図書室にあります。こういう本があるんだから、深田さんに興味をお持ちなら、これ

らを読んで深田さんがどういう人だったかを頭に入れていただきたいというのが、最大のお願いです。

ついでに『アルプス青春記』（朝比奈菊雄著　実業之日本社刊）を読んだことのある人がいますか。一人？　いてよかった（笑い）。田淵行男『黄色いテント』はどうですか。蜂谷緑の『常念の見える町』（いずれも実業之日本社刊）は？　これはこの人（注　近藤緑）の本ですから（笑い）。なぜこんな本を見せたかと言うと、私は編集者だからいろいろな本を作ってきたわけで、別に深田さんのことだけやってきたわけではありません。こういうこともしてきました。これも忘れないでくださいね（笑い）。本当はこういう話をしたほうが愉しいんです。深田さんのことは、すっかり書いてしまったから、喋れと言われても繰り返しになってしまうんですよ。

何で深田さんと知り合いになったかと言うと、私は学校を出て朋文堂という会社に入った。何のために入社したかと言うと、フランスのラルース社発行の『ラ・モンターニュ』（邦訳書名『山岳』）の翻訳権を朋文堂がとったんだけれど、編集者がいない。たまたま私が大学でフランス語をやったというので、その編集・制作をするためだったのです。その日本語版は第1巻から3巻まである山の百科事典です。その本に「世界の山々」という章があって、その中の「アジアの山」の翻訳を深田さんがされた。私は担当者ですから、翻訳があがるたびに、今日は何枚、来週また何枚と深田さんのところへ取りに行くわけです。それでお付き合いが始まったのです。

いま、深田さん、深田さんと言っていますが、私は編集者だから本当は深田先生と言わなきゃいけないんです。伺ったときには、ちゃんと先生と言っていました。でも、こういう場で喋るとき、深田先生ではよそよそしい感じがする。敬称ヌキで話しますので、森太郎さん、どうかご勘弁いただきたい（笑い）。

朋文堂は小さな会社だったから、何から何までやらなきゃならない。単行本の編集をしながら雑誌も手伝わなきゃならない。お蔭で、仕事のテクニックは覚えましたね。そのうちに月刊誌『山と高原』の担当編集者が社をやめてしまい、私に雑誌をやれというわけです。

そんなときに、深田さんが『別冊文藝春秋』に書いた「混まない名山―品格と孤独に憧れて」という文章の中で日本百名山を考えているとあった。「これだ！」と思ったんです。これはゼッタイいい企画だと。私は雑誌そのものを、いわゆる体育会系・山岳部系ではない雑誌にしたかった。深田さんの持っている文学性と山の経験とが、私の考えにぴったり当てはまる。それで世田谷のお宅に行って、交渉して書いてもらうことにしたのです。

そのときは深田さんも私も、まさか「百名山」がこんなバカバカしい騒ぎになるとは思っていないわけですよ。深田さんにとっては予想外だったと思います。いま、こうした騒ぎになって、ツアーが組まれているような状態は、実は、深田さんにとって好ましくない現象だと思う。どの文章を読んでも深田さんは、山は静かでなければいけないと書いています。ノボリを立てて団体で登るなんてとんでもない。山小屋だって大人数が泊る営業小屋に泊ったのではダメで、無人小屋で自炊する、そういう小屋でなくては本当の山の味はわからないと書いている。だからいま、大騒ぎになっている状態は、深田さんの志とは違うところに行ってしまっている。

実際に登っている人たちの話を聞いてみると、『日本百名山』という本を読んでいない人がかなりいる。必要なのは目次だけ。目次と百名山を案内したガイドブックがあればいいんですね。ということは、深田さんが百名山に込めた思いとは全く関係ないということです。だからいろんな機会をとらえて、正規の軌道に戻さなきゃいけない。皆さんも知り合いの人がいたら、深田さんの書いたもの―『日本百名山』はもちろん、そのほかの本もキチンと読むように言ってください。読むことによって、深田久弥の世界がどんなものなのかを頭に入れていただきたいと思います。

それぞれが言い残したこと

司会　それでは、言い残したことをどうぞ。

深田　ひとことだけ。父親と一緒に山に登った頃を思い出すと、いまの大森さんの話のように「山は静かでなきゃいかん」と、山では何も喋らないで歩いていた。私や弟がふざけながら先に行ってしまっても、別に止めるわけでもない。母親が「お父さんは山へ来ると全然喋らない。何が面白いんだろうね」なんて言っていた（笑い）。五万分の一を持って歩いていましたけれど、地図の読み方を僕らに教えるなんてことも一切なかった。それでも機嫌がよかったことは確かで、当時高くてなかなか買ってもらえなかった模型飛行機とか模型機関車を、温泉とか山小屋へいったときに母親が「お父さんに話してごらんなさい」なんて言ってくれた。モノをねだるには、山のお伴をしたときが一番よかった（笑い）。

久恋の山、雨飾山々頂の深田夫妻

司会　頂上で周囲の景観には目もくれず、兄弟が桃の缶詰の取りっこをする描写なんか、楽しかったですね。我が家でも同じような家族登山の時期がありました。初めてお会いしたとき、森太郎さんは高校生でした。大森さんとも50年のお付き合いですね。お互いに年をとったものです（笑い）。藤本さんどうぞ。

藤本　実はここで話すことになって、深田さんの話を覚えているかと、山岳部で一年下だったのに聞いたら、全然覚えていなかった。だとすると、自分が一年のときかと思って、レジュメに1956年と書いたんです。世界山岳百科事典を見ても、深田久弥の項に安川茂雄さんが1956（昭和31）年にジュガール・ヒマールに遠征したと書いてあるので、その通りかと思っていた。

ところが、別の本を読みますと1958年と書いてある。どっちが本当かと思いあまっていたら、深田さんは向こうで川喜田二郎さんの隊にお会いになっているんですね。その学術隊に参加していた高山龍三さんという方を存じ上げていて「何年にお会いになりましたか」と聞きましたら1958年と言われました。それで、今日は最初にレジュメの訂正をしなければと思って来ましたら、既に修正されていました。

当事者にとっては、何月何日を書きとめるのが重要で、それが何年であるかは自明のことだったのでしょうが、50年もたってしまうと意外に苦労がいるものです。

大森　私は、世田谷のお宅には月に一度は行っていた。行っても30分くらいしかいないんですよ。というのは、深田さんは原稿が遅くてほとんど締切りに間に合わない。ひどい

ときは、ほかの原稿は全部校了になって、2日後には印刷機が回るというのに、まだ原稿が入らない。そうなるとページが真っ白で出てしまうわけだから、こっちの頭の中が真っ白になる（笑い）。深田さんの所に行っても、原稿をもらったらすぐ社に戻って割付けして印刷に回さなきゃならない。だから、ゆっくり話をしている間がなかった。

　ほかの人が書いたものを読むと、深田さんのお宅でお酒をご馳走になったとあるのに、私はいっぺんもない（笑い）。行くのが午前中で、原稿をもらって、すぐ帰るという状態だから。当時、森太郎さんが中学の終わりか、高校生だったと思うけど、一度も会っていません。会うわけはないですよ、学校へ行っているんだから（笑い）。

　深田さんはお酒が大好きだから、茅ヶ岳で倒れたのもお酒が関係しているんじゃないかと思う。吉沢一郎さんが「深田のうちで酒を飲んでいたヤツは殺人犯だ」と言ったけれど、私は一度も飲んでいないから犯人ではない（笑い）。それくらい、お酒が好きで、みんな集まっては飲んでいたみたいですね。

　深田さんは旧制の一高ですが、勉強したのはドイツ語で、フランス語はやってなかった。深田さんが翻訳したこの本（『ラ・モンターニユ』）は、原本がフランス語です。深田さんは大岡昇平と堀辰雄にフランス語の初歩を習っている。大岡昇平は京大の仏文出身で、スタンダールの翻訳もしていますから、フランス語は出来たと思います。堀辰雄は、この前の緑爽会会報（111号）に「風立ちぬ、いざ生きめやも」なんて洒落たことが書いてあったけど（笑い）、小説『風立ちぬ』の作者で、あの一節はポール・ヴァレリーの「海辺の墓地」という詩からとったものです。ヴァレリーの詩集は岩波文庫にもあって、それは鈴木信太郎訳ですが、この一行は堀辰雄の訳のほうがずっといい。深田さんは非常にいい先生に習ったといえます。その後は独学です。深田さんは努力の人ですよ。独学でエルゾーグの『アンナプルナ』の原本を夢中になって読んでいます。

深田　いまの話で、私も記憶に残っていることがあります。私が新聞社に入社して、結婚してからは離れて暮らしていたのですが、ある晩、訪ねたら父親がテレビのフランス語講座を見ていました。母親が「いま、お父さんは勉強中」と言うのを聞いて、恥ずかしいと思いました。60過ぎた父親がテレビで勉強しているのに、私は毎日連チャンで（笑い）。

　そのころ、勤務先の日本経済新聞社が女性向けの雑誌を創刊することになり、フランスのファッション誌の記事の要約が必要となりました。私はフランス語がチンプンカンプンなので、実家へ持って行って父親に「これを訳してくれませんか」と言うと「わかった」と引き受けて、途中まで訳したところで、茅ヶ岳で亡くなってしまったのです。

深田さんとの思い出

司会　それでは会場からもご発言をいただきます。宗實さんどうぞ。

宗實慶子（関西支部）　1958年に深田さんがジュガール・ヒマールへ行かれるときに、私どもは食糧の準備をお手伝いいたしました。山川さんのお宅に集まって、ダンボール詰めをしたのですが、「次にあなたたちが行くときにはお手伝いしますよ」と言われました。私たちはヒマラヤへ行くというのは、こういうことなんだとわかりました。登山許可とか渡航手続、また、お金があれば行ける今と違って外貨をいただくのが難しいころでした。

　その後、穴田さんたちブッシュ山の会の仲間と「こうやってヒマラヤへ行くのね」「行きたいわねえ」と言い合いました。最初はガネッシュが目標でしたが、三田幸夫さんや田口二郎さん、松田雄一さんから情報をいただき、インドのデオ・ティバに遠征、登頂しました。

深田　浜中（宗實の旧姓）さんと奥川（穴田の旧姓）さんですね。我が家にもお見えになりましたよね。だいたいは男性のお客だったのに、若くてきれいな女性が来られて、「あの人はだれ?」と母親に聞いたら「女の人なのに、今度ヒマラヤに行くのよ」と言いました。お顔は忘れましたが、お名前は覚えています。

司会　深田さんのお宅が、ヒマラヤ相談所のようだったころのことを、山本さんから。

山本良三（静岡大学山岳部OB）　深田さんに初めてお会いしたのは、1960年だったか、静岡に講演に来てくださったときです。1964年に銀山平で文部省主催の海外登山研修会があって、海外に行った人たちが70～80名集まった。そのとき、宿舎の後ろにスロープがあるのを見て深田さんが「あそこで滑ろうや」と言われたんで、皆でそこをならして50～60mの斜面を滑りました。深田さんが真っ先にシュテムボーゲンでいかれましたが、お年にしてはまあまあ（笑い）。

　あとは、遠征前に2度ほど夜中に九山山房にお邪魔しました。登山申請書に山の経度・緯度の記入欄があって、困って相談したら「わかるから、すぐいらっしゃい」と言われて押しかけて行ったのです。経度・緯度の仕事が終わって、帰ろうとしたら「まあ飲んでいらっしゃい」と引き止められた。真夜中なのに（笑い）。そんな思い出があります。

　私は大森さんと違って体育会系なので、文化の匂いがなくてすみません（笑い）。

司会　伺うとすぐお酒が出ましたものね。森太郎さんは受験勉強中でしたでしょうに、ご迷惑おかけしました（笑い）。

深田　母親もサービス精神があって、大学に入ってから私の友人がきても、すぐ酒を出すんですよ。未成年かもしれないのに（笑い）。

穴田雪江　志げ子夫人には感心しました。あるとき、隣のお部屋で沢二さんの英語を見てあげているのが聞こえてきて、高校生に教えられるなんて素晴らしい方だと思いましたね。

布川欣一（山岳史家）　深田さんのお名前は「ふかた」ですか、「ふかだ」ですか。

深田　父の実家のある大聖寺のあたりでは、濁らないで「ふかた」といいます。父もそうした環境で育って、故郷に愛着をもっていたので署名もFUKATAで通しました。東京では「ふかだ」と言いますね。東京に転校したとき、「ふかた」と書いたら、担任から「君は“ふかた”と言うの、変わっているね」と言われて（笑い）、なんとなく「ふかだ」と言うようになった。一般的には「ふかだ」のほうが言いやすいですね。弟は父に私淑していたので、ずっと「ふかた」と名乗っています。

布川　もう一つ。今日の話は戦後が中心ですが、昭和10年に霧ヶ峰で「山の会」が始まったときに深田さんが参加しておられます。また、川端康成『雪国』に出てくる谷川岳の情報は、全て深田さんから出ていると思うのですが、その辺のことを何かお聞きですか。

深田　父は戦前のことは話さなかったですね。前の奥さんに対する遠慮があったのか、母親に遠慮したのかもしれませんが。

藤本　深田さんは哲学の専攻でドイツ語をなさったし、大森さんが担当されたというフランス語の翻訳もされた。また、メモを見ると英語で書かれています。それも非常に的確な単語を使われていますね。

深田　語学は好きでしたね。

藤本　そうでしょうね。でなきゃ、あんなに

沢山の本は読めませんよね。

司会　深田さんのお誕生日は3月11日ですね。近藤と横山厚夫さんも同じ誕生日なのです。『里見八犬伝』的な因縁を感じます（笑い）。東日本大震災のために、3月11日はおめでたいどころではなくなりましたが。

藤本　お命日の3月21日は、お大師さまの亡くなった日です。高野山では大事な日です。

深田　母の四十九日に藤本さんがお経をあげてくださいましたね。この方は山へも行くけどお坊さんなのかな、と思いました。私の新聞社の関係に共通の友人がいて「藤本さんはいい男だよ」と言っていました。私が高校生のころ家に来られた方と、社会人になってからお付き合いができて喜んでいます。

中島忠（信濃支部）今日は藤本さんも話されるというので出てきました。深田先生が信濃支部主催のシルクロードの講演会に来られたとき、私はまだ正規の支部員ではなく準会員で末席にいました。その会の後で、中国戦線の深田隊で一緒だった俳句仲間の和田利章氏が見えて、戦地での句会の話になって「こんなところで句を詠んでいるようじゃ、この戦争は敗けだな」と話したことを先輩の井口謙司さんから聞きました。

深田　山以外の父の趣味は俳句でした。大聖寺のころから俳句の会を主宰していました。上京してからは、ヒマラヤとか山関係の仕事が忙しくなって句会はしませんでした。戦地ではよく句会をやって、それを持ち帰った方があって、『湖南句集』というのが出ています。

　カメラも戦前はやっていたようですが、戦後は「山へ行ったら景色は自分の目に焼き付けてくるものだ」と言っていました。昔はライカとか高級なカメラを持っていたようですが、多分、僕らの食費に変わってしまったんでしょう（笑い）。将棋は結構強くて、アマチュアの三段か四段くらい。碁は弱くて、私のほうが強かった（笑い）。

司会　中国戦線ではあまり戦争はしないで、句会をやっておられたとか（笑い）。

深田　母親もそんなことを言っていましたが、何度かは弾がぴゅんぴゅん飛んで来て、もう駄目かということもあったようです。

参加者？　深田さんは山スキーも相当お上手だったと思います。ご本の中に、富士山から滑降したと書いてありますから。

深田　私が連れて行ってもらった頃でも、父はどんな所でも滑っていましたから、その意味では上手いと思いますが、パラレルクリスチャニアとかウェーデルンとかのように、格好のいいスキーではありません（笑い）。

石岡慎介（千葉支部）　森太郎さんとは前に3度お会いしています。世田谷文学館の図録を3冊持っていますので、山岳会に寄贈しようと思います。

司会　志げ子夫人は素晴らしい方でした。「久恋の山」でなく「久恋の人」と結婚できた深田さんは、本当にお幸せだったと思います。

大森　ヒマラヤに行くなら「美人を妻にしてはいけない」とありましたが、あれは嘘ですね、自分は美人を奥さんにしているのに。

藤本　だからご自分は、奥さんのところに早く帰りたかったんでしょう。あれは反面教師の講演です（笑い）。

深田　母親が美人だったとは思いませんが、仲はよかったですね。どちらかと言えば、母親のほうが父に惚れていたように思います。自分を犠牲にしても父親に尽くしていました。

司会　ご一緒に旅行をしても、切符の手配から宿のこと、きびきびと動くのは志げ子さんでしたね。「あなたは何にもなさらない」と言いながら、よく尽くしておられました。深田さんは先に逝って、不自由で仕方がなくて、奥さんが自分と同じ年になったときに「もういいだろう」と迎えに来られたんでしょうね。

深田　父の句集ができて、それを大聖寺のお墓に供えたいからとお墓参りに行って、帰った翌日に交通事故で亡くなったのです。お彼岸で、父の命日と同じ日でしたから、私らも父親が呼びにきたのだろうと言い合いました。

司会　庭先に九山山房ができて、深田さんは嬉しそうでしたね。森太郎さんもほっとなさったでしょう。毎日隣の部屋で酒盛りでは、勉強もできなかったでしょうから（笑い）。

山本　夜、真っ暗になっても、あそこだけは煌々と電気がついていましたね。

向後元彦（東京農大探険部ＯＢ）　深田さんの家の木戸を開けると、ヤクの首につける鈴がなった。あれはぼくが1962年にネパールから持ち帰ったものです。ぼくが『ヒマラヤ　山と人』を読んだのは、高校生のとき。スモール・エクスペデションの話の中に「30万か40万あればヒマラヤに行ける」とあるのを知って、ヒマラヤに取りつかれた。この30年、マングローブの研究をしております（向後元彦『緑の冒険』岩波新書）。隣はうちの奥さんです。深田夫妻のお仲人で結婚しました。

深田　うちに向後さんの結婚式のアルバムがありますよ。

向後　この人がネパールの衣装を着て写っています。深田さんのお宅で知り合った宮本千晴―宮本常一さんの長男ですが、彼ともう50年も一緒に仕事をしています。

向後紀代美　志げ子さんは私の高校の先輩でした。

深田　ああ、お茶の水付属の…。

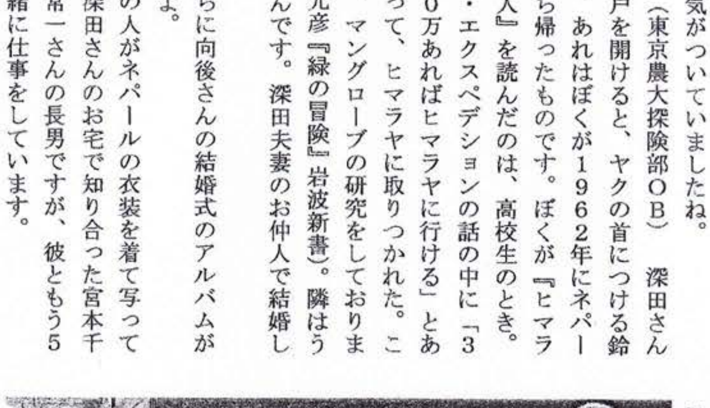
藤本　向後さんは『ヒマラヤの高峰』のトゥインズの写真を撮られた方ですね。

向後　写真集にスケッチを描いたのは、ぼくと宮本千晴です。深田さんにはたいへんお世話になりました。

大森　さっき回した写真はどこに行っていますか。見て気がついたかしら。大聖寺の「深田久弥　山の文化館」にＪＡＣの何人かが行ったときの記念写真です。これを見た途端、「あっ、背後霊だ！」と思った。中に陳列してある深田さんの写真が反射して写っているでしょう。気味が悪いと言った人もいるが、私は深田さんが「俺も仲間にいれてくれよ」と言っているような気がしました。

司会　深田さんならきっとそうですよ、「もう帰るのか、飲んで行きなさいよ」って（笑い）。

　時間がきましたので今日はこれで終わります。お時間のある方は、後で深田さんのために献杯をしに行きましょう。（記録　近藤　緑）



後列左から２人目３人目の女性の間に深田さんが映っている　写真提供・長澤 洋
「深田久弥　山の文化館」にて。

編集後記★鼎談は、録音状態が悪く、また紙幅の関係で全てを記録できなかったことをお詫びします。★向寒の折からご自愛ください。（K）